

## 筒井八百珠（一八六三）〜一九二一）

—その生涯と業績—

長門谷 洋 治

岡山医学専門学校校長筒井八百珠（やおじゅ 一八六三）〜一九二一、敬称略）は、大正十一年一月二十八日、五十七歳で死亡した。同校が岡山医科大学に昇格せんとする直前のことであった。

彼が千葉医学専門学校の教授から菅之芳校長の後任として、岡山医専校長・岡山県病院院長となったのは大正二年七月であったから、岡山在任は八年余であった。さほど長い期間ではなかったが、彼が岡山大学の基礎を築くのに大きな貢献をなしたことは疑いのないところである。

彼の専門は皮膚病学・花柳病学であったが、当時は皮膚科が完全に独立していなかったこともあって外科に属していた。土肥慶蔵（一八六六）〜一九三一）は「金沢の下平用彩氏、千葉の筒井八百珠氏、岡山の高橋金一郎氏は執れも

外科教授を以て皮膚病微生物科を兼担せり」と述べている（大正二年）。もっともすでに三大学（東大・京大・九大）には皮膚病微生物学の教授がいたし、地方の医学校にも独立した教科をもっているところ（例 京都府立・江馬章太郎、大阪・桜根孝之進、愛知・楠太）があり、それぞれ成果をあげていた。

筒井は文久三年、紀州新宮に生まれ、明治十年三重県医学校に入学するも、同十二年県命により東京大学医学部予科に転じ、同十七年これを卒業、同二十二年帝国大学医科大学卒業（東大在学一〇年余）。同級に上記下平がおり、一年あとに上記土肥、高橋がいた。卒業後第一医院外科医局の助手となり、スクリバにつく。同二十三年、第一高等学校教諭として千葉に勤務。同三十二年、皮膚病花柳病学研究のためドイツ留学を命ぜられる。同三十四年帰朝、同四十一年、医学博士（東大より授与）、千葉医専教授。そして上述のように大正二年、岡山に移る。

彼は、わが国で色素性乾皮症を記載した最初の人（明治二十六年）とされる。またアカントーシス・ニグリカンス（黒色表皮腫）の報告、とくに同症と胃癌との関係に論及

した初期の人（明治三十六年）である。明治三十六年の日本皮膚科学会（第三回）では、「横痃の療法」について特別講演を行っている。岡山赴任後は人工高山太陽燈療法に力を入れ、症例報告（ポロケラトージス、尋常性狼瘡、色素性黴毒疹、黄癬など）も活発にしている。

『皮膚科泌尿器科雑誌』には二巻（明治三十五年）に癩病について論じたのはじめ多数の論文を発表した。

筒井は明治二十九年『皮膚病学』を南江堂より上梓する。彼はその序文で「本邦に於ては明治二十一年の交、二、三の書籍梓に上りし以後また一の新著あるを聞かず」と記すが、本書は日本人症例をも採用している点で先駆的な専門書といえ、その後増補し、大正八年には六版を出している。同三十三年にはやはり南江堂より『皮膚病図譜』を出版（翌年再版）する。これはウィーンのムラツェックの著を訳したのだが、カラー図版を含む六五図は外人症例とはいえ、わが国皮膚科医の好指針になったものと推察される。ちなみに土肥が『日本皮膚病黴毒図譜』の第一帙を出すのが三年後の明治三十六年である。

彼の著書として、さらに次のものが知られる。

臨牀医典 南江堂 明治二十三年

花柳病学 南江堂 明治三十年

新撰外科手術 南江堂 明治三十七年

花柳病講話 博文館 明治四十一年（『家庭衛生講話、

第五編）

このうち『花柳病学』は前述の『皮膚病学』と対になるもので、本書もまたよく用いられた（同四十一年、一〇版）。『花柳病講話』は啓蒙的なものだが、すでに同三十八年、同じ博文館の『家庭衛生叢書、第七編』の中で「黴毒に関する家庭の注意」を記している。

『臨牀医典』は一般医家の座右の書としてポケット版（13 cm × 9 cm）で刊行され、当時の医学書のベストセラー的存在であったと思われる、大正十三年には三一版を出している。初版を出したのは大学卒業後わずか一年目であり、彼の非凡さがうかがえる。凡例に「本書ハ医学諸科各病ノ原因、症候、診断、予後、療法及処方ヲ記載ス。其付録ハ診断及治療ニ必要ナル諸件及医師及薬剤師ノ最モ注意スベキ法律ノ各条及伝染病規則等ヲ摘録ス」とある。

彼の人となりについては、岡山の卒業生の一人が卒業式

にあたっての「職業に貴賤はないが、然し唯、医業は尊い人命をあずかる崇高な職業であることを忘れるな」の彼の一言が脳底深く刻まれた（渭東薫、『堺市医師会報』昭和六十年十月）と記していることからもうかがい知られる。

（大阪府豊中市）

## トウキユデイデス『戦史』における ギリシア医学の影響

今井正浩

古代ギリシアの歴史著述家であるトゥキユデイデス（前四六〇～三九九年頃）の『戦史』第二巻四七節以下には、ペロポネソス戦争（前四三一～四〇四年）開戦二年目にアテナイをおそい、その後の戦局を大きく左右した「疫病」に関する詳細な記事がみえる。病状の経過をめぐる記述が当時の医学用語（ほとんどがヒポクラテス文献中に見出される）を正確に用いてなされている点からも、史家が医学について深い知識をもっていたことがよく指摘されてきている。本発表では、これよりさらに広い観点に立って、史家の歴史認識それ自体にヒポクラテス医学派が少なからぬ影響を与えたとする Weidauer の研究などをもとに、史家と当時の医学思想とのつながりについて考えてみたい。